

主日礼拝説教「あなたをさいなむもの」予稿

日本基督教団石神井教会 2026年6月14日

【旧約聖書日課】サムエル記上 16章14～23節

¹⁴主の霊はサウルから離れ、主から来る悪霊が彼をさいなむようになった。¹⁵サウルの家臣はサウルに勧めた。「あなたをさいなむのは神からの悪霊でしょう。¹⁶王様、御前に仕えるこの僕どもにお命じになり、豎琴を上手に奏でる者を探させてください。神からの悪霊が王様を襲うとき、おそばで彼の奏でる豎琴が王様の御気分を良くするでしょう。」¹⁷サウルは家臣に命じた。「わたしのために豎琴の名手を見つけ出して、連れて来なさい。」¹⁸従者の一人が答えた。「わたしが会ったベツレヘムの人エッサイの息子は豎琴を巧みに奏でるうえに、勇敢な戦士で、戦術の心得もあり、しかも、言葉に分別があって外見も良く、まさに主が共におられる人です。」¹⁹サウルは、エッサイに使者を立てて言った。「あなたの息子で、羊の番をするダビデを、わたしのもとによこしなさい。」²⁰エッサイは、パンを積んだらばとぶどう酒の入った革袋と子山羊一匹を用意し、息子ダビデに持たせてサウルに送った。²¹ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。王はダビデが大層気に入って、王の武器を持つ者に取り立てた。²²サウルはエッサイに言い送った。「ダビデをわたしに任せさせるように。彼は、わたしの心に適った。」²³神の霊がサウルを襲うたびに、ダビデが傍らで豎琴を奏でると、サウルは心が安まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れた。

【使徒書日課】使徒言行録 16章16～24節

¹⁶わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。¹⁷彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」¹⁸彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。¹⁹ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまうことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。²⁰そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。²¹ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」²²群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。²³そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。²⁴この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

【福音書日課】マルコによる福音書 5章1～20節

¹一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。²イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。³この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてきえつなぎとめておくことはできなかった。⁴これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。⁵彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。⁶イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、⁷大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」⁸イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。⁹そこで、イエスが、「名は何というのか」と尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。¹⁰そ

して、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。¹¹ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。¹²汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。¹³イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。¹⁴豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。¹⁵彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。¹⁶成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。¹⁷そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。¹⁸イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。¹⁹イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」²⁰その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

「いと高き神の子！」【こども説教のために】

三週間前にペンテコステ（聖霊降臨祭）を祝った教会に集められて来た皆さんのことを、「神の子らよ」とお呼びいたしましょう。ここでは、お互いに、「神の子！」とお呼びいたしましょう。ここは、神の霊、聖霊が一人ひとりに分け与えられ、また満たされているところだからです。

わたしたちは、ここで、神のことを「天の父」とお呼びします。目に見えなくても、そうお呼びします。主イエスが、そうお呼びするようにお教えくださいました。「主の祈り」を「天におられるわたしたちの父よ」と祈るように、お教えくださいました。わたしたちは、神が「わたしたちの父」でいてくださることを知りませんでした。そうお呼びします。主イエスがお教えくださったからです。そうすることができるのは、「父よ」とお呼びする霊を、神がお与えくださったからです。神は、わたしたちのことを「わたしの愛する子らよ」とお呼びくださって、わたしたちが「父よ」とお応えすることのできる霊を注いでくださったのです。

霊のお働きに従うならば、わたしたちは、神を「天の父」とお呼びし、お互いのことを「神の子」と呼び合うことができます。その霊が、たとえ「汚れた霊」であっても、「占いの霊」であっても、「悪霊」であっても、そうすることができるでしょう。「汚れた霊」を持つ者は、主イエスのことを「いと高き神の子」と呼びました。

ただ、「汚れた霊」を持つ者は、混乱しているかもしれません。「いと高き神の子」を拒もうとして、苦しんでいるかもしれません。主イエスは、その「汚れた霊」の向かう先をはっきりとさせてくださるのです。「汚れた霊」を「豚の群れ」に向かわせていただいた者は、まっすぐに主イエスに向かう「霊」だけを持つ者としていただいたのです。

「かまわないでくれ」

6月第二日曜日を「花の日・こどもの日」とする習慣は、150年ほど前に、米国のメソジスト教会で始まったとされます。19世紀の米国は、多様に展開したキリスト教会が多くの人々の受け皿になる一方で、伝統的な教会では子どもたちへの信仰継承が大きな課題になっていたのです。プロテスタント教会の営みは、自覚的な信仰を持てると考えられた成人を中心に整えられていました。未熟な子どもたちは、教育を施し、自覚的な信仰を身に付けさせる必要のある者たちとみなされていたのです。そのための営みとして、日曜学校（後に教会学校）は盛んに行われるようになりましたが、教会の中で成人と子どもたちとの間には、見えない壁のようなものが生まれ始めていたのでしょう。そのような時代に、子どもたちが教会の中で歓迎された存在であることを示したいと考えた者たちがいました。礼拝堂をたくさんの花で飾り、子どもたちを主役とした礼拝をしようと試みたのです。それが、「花の日」あるいは「こどもの日」として定着する行事の始まりだったと言われます。

日本のプロテスタント教会にも、宣教師たちによってこの行事が紹介されました。どういうわけか、日本の教会では、「花の日」は子どもたちが花を届ける行事として広まりました。教会に来ることができなくなった高齢の信者の自宅や入居施設、交番の警官や消防署の消防士に届けるのです。どこか、本来の趣旨から離れてしまっていました。子どもたちを喜ばせるはずが、子どもたちが喜ばせる役を引き受けさせられてしまっていたのです。

主イエスは、「子供たちをわたしのところに來させなさい」(マルコ 10:14)、とおっしゃいました。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」(同 9:37)とおっしゃられたのです。それは、わたしたち自身のためでもあります。「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(同 10:15)からです。

もちろん、子どもだからといって、心が無垢で素直に信仰を受け入れられているとは限らないでしょう。子どもたちにも疑いがあり、葛藤があります。けれども、教会で子どもたちと共に歩んでみるとわかるのです。子どもたちのほうがずっと正直に、お互いを「神の子」として受け入れ合おうと励んでいるのです。他方で訳知り顔の大人のほうが、お互いを「神の子」として受け入れ合うことをしないで済ませる理屈を考えたりしがちなのです。

ゲラサ人の地方で主イエスがお会いになった「汚れた霊に取りつかれた人」は、主イエスのことを「いと高き神の子」と呼びながら、「かまわないでくれ」と拒んでいました。互いのことを「神の子」と呼ぶことを知りながら、わたしたちも、互いに「かまわないでくれ」と拒み合うことがあるのです。けれども、主イエスは、そのようなわたしたちを放ってはおかれぬのです。

渋滞する《霊》の交通整理を

聖霊降臨を祝うことから始まった弟子たちの教会は、一人ひとりに神からの霊が分け与えられていることを信じるころから、その歩みを始めました。その神からの聖霊で満たされているところこそ、教会なのです。

使徒パウロは、「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」（ローマ 8:14）、「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」（ガラ 3:26）と、繰り返して証しました。パウロは、「わたしは神の子」という自分一人の自覚を促すためだけに、そう証したのではありません。「わたしたちは神の子ら」と、お互いが「神の子ら」として受け入れ合う者とされることを願って、そう証したのです。

わたしたちは、確かに神からの霊をいただいているのです。神からの霊に導かれ始めているのです。だからこそ、わたしたちは、このいただいている聖霊が、わたしたちの中でまっすぐに、互いのことを「神の子ら」と受け入れ合うことができるように働きくださることを願わないではいられません。わたしたちの中で働きくださる霊が、「神の子ら」にふさわしい向きに整えられるために、主イエス・キリストの指し示してくださることを、いつも確かめないわけにはいかないのです。

いにしへの時代、預言者に油注がれ、主の霊が満たされてイスラエルの王として立てられたサウルは、あるときから、悪霊にさいなまれるようになりました。それは、「**主から来る悪霊**」だったということです。「**神からの悪霊**」がサウルをさいなみ、苦しめ始めたのです。サウルは、神の霊をうまく受けとめられなくなっていたのでしょう。主の霊にまっすぐに応えて、主の僕として立ち続けることが、うまくできなくなっていたのでしょう。

主イエスの前に現れたゲラサの「**汚れた霊に取りつかれた人**」も、同様かもしれません。「**汚れた霊**」とは、「**純粋ではない霊**」という意味です。「**霊**」が何かと混ざり合ってしまった、どこを向いたらよいか分からなくなってしまっているのです。彼を縛るものが少なからずありました。そこに縛られたままでもできずにいました。混乱した「**汚れた霊**」を、主イエスは、解きほぐしてくださったのです。「**名はレギオン**」、その行き先は「**豚の中**」と。彼に残されたのは、主イエスを見ることだけでした。

すでに神の霊をいただけてきました。それでも、わたしたち自身が抱えてきた諸々の霊との間に葛藤を起こし、混乱し、神の霊が導いてくださる方向を見失ってしまうことがあるかもしれません。そのとき、わたしたちは、ただ主イエス・キリストその方を見ることで、その葛藤から離れることができるのです。主イエスが指し示してくださることを思い起こすとき、神の霊は、わたしたちが互いを「神の子ら」とする道を拓いてくださるのです。